大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

分節的牧畜社会における権力（2）：エチオピア西南部クシ系農耕牧畜民ダサネチにおける生業システムと権力に関する考察

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2010-08-09
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 宮脇, 幸生
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006312

分節的牧畜社会における権力(2)

―エチオピア西南部クシ系農牧民ダサネチにおける生業システムと権力に関する考察―

宮脇幸生

(3) 資源および労働力の社会的配分

I 土地の分配と権力

ダサネチ社会は八つの大きな集団からなっており、アルマゴールはこれを部族セクション(tribal section)と呼んでいる。それぞれの部族セクションは部族セクション名をもっており、それはかつて「山々と湖のむこうのはるかかなたの土地から」やって来て現在のダサネチランドに住みついた彼らの祖先たちの、あるいは祖先たちの属していた部族の名前に由来しているといわれる。二つの小さな部族セクションをのぞく他の六つの部族セクションは、それぞれのテリトリーをもち、それは居住地域と一致している。人々の所属する部族セクションは、父系によって継承される。

主として牧畜に用いられるオモ川西岸の牧草地と、牧畜および農耕に用いられる東岸の「冠水低地」は、その土地をテリトリーとする部族セクションによって集団的に領有される。だからその部族セクションに所属する者は、これらの土地を独立して利用しうる権利をもつ。なかでも農耕の目的に利用される「冠水低地」は「神の土地」といわれ、そこで耕作する権利は、特定の個人からではなく、「神」によって授けられるものであることを示している。そこを耕作する者はその権利を、氾濫の後にそこを開墾することによって手に入れ、その権利は彼がそこを立ち去るまで保持される。翌年の使用権は、前年の使用者とはかかわりなく、新たにそこを開墾した者のものとなる。

こうした集団的に領有されている社会的資源とは対照的に、「河岸台地」の耕作権は、常になんらかの個人から派生している。「河岸台地」の耕作権には二種類ある。ひとつは「父の土地(land of a father/les baba)」にかかわるものであり、もうひとつは「割り当てられた土地(land that has been allocated/les logo)」にかかわるものである。

「父の土地」とは、世襲によって所有権が継承される「河岸台地」である。前に述べたように、ダサネチランドは長期的に見ると、オモ川の水位の上昇、下降にともない、大きな地形的変化を示している。現在耕作されている「河岸台地」は、今世紀の初頭には水面下にあったものと考えられる。どのような過程を経てこうした所有権が確立されたかはわからないけれども、「父の土地」の所有者たちは、オモ川の

水が引き始めたとき彼らの祖父、あるいは父が浅い沼地にやって来て、土地を開墾したのだと伝えている。アルマゴールによると、このようなかたちで比較的広大な「河岸台地」を所有している人々は、わずか五七人にすぎない。この「父の土地」にたいする「所有権」（「耕作権」ではない）の特徴は、世襲によって継承され、決して譲渡されえないところにある。

このように、「父の土地」にたいする所有者の権利はとても強力なものに思えるが、実際は非常に限られたものである。所有者は自分が耕作する分を除いて、残りは他者に貸与してしまう。というのは、農耕活動は世帯内労働力によってなされるため、耕作しうる面積もそれによって限定されるのである。さらに、所有者から土地を貸与された者がその一部分を第三者に又貸しすることもしばしばある。

「割り当てられた土地」とは、このようにして、「父の土地」の所有者から他者に貸与された土地のことである。この土地にたいする権利の特徴として、次の二点をあげることができる。まずひとつは、土地を貸与された者が、所有者に無断で第三者に又貸しができるということ、第二に、耕作者がその土地を去ったら、「耕作権」を含むすべての権利は所有者のもとにもどるということである。もしその土地が再び冠水し、耕作可能になったとき、もとの耕作者がまたその土地を耕作したいと願うならば、土地はまた最初から貸与し直されねばならない。また、土地の所有者も、それを第三者に又貸しした者も、耕作者からその収穫の一部を搾取することはない。

このように、「河岸台地」はわずかの人々によって個人的に所有されているのだけれど、実際には貸与、再貸与によって、多くの人々に分配され、結果的にはほぼすべての世帯が「河岸台地」の耕作権をもつことになる。アルマゴールによれば、それぞれの世帯の耕作する「河岸台地」の面積はほぼ等しいという。

さて前節では、「河岸台地」は「冠水低地」に較べて、不規則な自然の条件により左右されにくいと述べた。相対的には確かにそのとおりなのだけれど、ある特定の「河岸台地」が必ず毎年耕作可能な条件を満たすということはいえない。アルマゴールは一六九の「河岸台地」の耕作者の事例について調査をしているが、そのうちの三二パーセントは、現在の土地に移ってきて一年に満たない。三年以内の者を含めると八三パーセントにのぼる。このことは、耕作権の放棄が実に頻繁になされていることを示唆している。それならばなぜ、このように頻繁に耕作権が放棄されるのだろうか。アルマゴールの調査によると、一六九例のうち八二例は、以前の耕作地が冠水しなかったため耕作権を放棄している。さらに三二例は、収穫が不充分であったという理由で耕作権を放棄している。この二つが耕作権を放棄した理由のうちで最も多くあげられたもので、あわせて全体の五八パーセントを占める。このことから次のことが言えるだろう。「河岸台地」の耕作地としての安定性も相対的なものであり、冠水の不規則性によって前年は耕作可能であった土地が翌年は耕作不可能になる場合がある。そのため多くの世帯がその耕作権を放棄して、新たな土地を求めなければならない。少なくとも、たいていの世帯は同一の耕作地に四年ととどまらない。貴重な社会的資源である「河岸台地」は、人々の間で絶えず再分配がくりかえされているのである。

さて、「父の土地」の所有者は、自分の世帯のために最良の耕作地を確保できる。けれどもこうした所有者はわずか五七人にすぎない。ほとんどのダサネチは、これらの所有者から土地を貸与してもらうか、

さらには貸与された土地を又貸ししてもらわねばならない。又貸しは、土地の所有者に無断でなされうるのだし、たいていのダサネチは所有者以外から土地を借りるのだから、土地の分配における何らかの「裁定者」としてわずか五七人の「父の土地」の所有者を考慮に入れる必要はない。従って、ここで土地の分配の問題は、次のように置き換えることができる。すなわち、『人々はどのようなルートを通じて、「河岸台地」の耕作可能な土地の耕作権を、他者から手に入れるのか。』これには二つの条件がつく。すなわち、こうした土地の耕作権は絶対に必要であること。そして、冠水が不規則であるため、あるとき土地を貸す立場にある者も、場合によっては土地を借りる側に転ずる可能性があるということである。つまり、こうしたルートはアド・ホックなものではなく、常に、そしてほぼ全員に利用可能な形で、社会的に制度化されているものであろうと予想できるのである。

II　移牧と労働の組織形態

ほとんどのダサネチは、家畜のための新鮮な牧草を求めて一年中移動をくりかえす。アルマゴールによれば、家畜の小さな群れへの分散とそのすばやい移動は、結果的に過放牧の危険を回避する機能をはたしている。けれどもこうした移牧の形態を維持するには、多大な労働力が必要であることを前節では指摘した。それでは実際に、ダサネチの牧畜においてはどのような形で労働力が組織化されているのだろうか。この点について、少しくわしくみてみよう。

アルマゴールはダサネチの居住形態を、部落（settlements）、ベース・キャンプ（base camps）、家畜キャンプ（stock comps）、耕作者キャンプ（cultivators' camps）に区別する。

「部落」は、大雨によってできる湿地やオモ川の氾濫の影響を受けず、農耕地や水場に近い、比較的高い「河岸台地」の上に形成される。「部落」には、様々な年令、クランの、二〜三〇〇人から二〜三〇〇〇人の人々がいる。ひとつの「部落」は、一〇から一五の小屋をもついくつかの「居住単位（residential unit）」からなっている。「居住単位」は互いに数百メートル離れている。

四〜五月の大雨の頃、「部落」には二〇〇〜二五〇の小屋が建てられ、最も人の集中する時期となる。大雨が終わり牧畜の季節になると、男たちはオモ川西岸の牧草地を西へと向かう。「部落」には老人、幼児のいる女たち、そして牧畜に直接かかわっていない男たちが残る。やがて八月になり「河岸台地」でのソルガムの播種が始まると、「部落」には人が増え始め、大雨が始まると再び人々が集中する。各世帯は毎年同一の「河岸台地」で耕作するわけではないので、耕作地にあわせて「部落」を変えることがある。

大雨が終わり、オモ川西岸での牧畜が始まると、「部落」の異なった「居住単位」に属する人々が、牧草地に近くて便利な場所に共同のキャンプを設営することがある。これが「ベース・キャンプ」である。これは二五人から五〇人の人々からなり、牧畜、ミルクや穀物の運搬、子供の世話などで協力する。「ベース・キャンプ」は、「部落」と次に述べる「家畜キャンプ」の中間につくられ、各世帯のメンバーと家畜は、これら三つの居住地に三分される。

「家畜キャンプ」は、川から遠い牧草地に設営されるキャンプである。家畜の所有者は普通「ベース・キャンプ」におり、「家畜キャンプ」には彼らから家畜の世話をまかされた若い牧童たちがいる。「家畜キャンプ」は、「牛のキャンプ」と「小家畜のキャンプ」にわかれている。

「牛のキャンプ」は、若者や少年たち、そして農閑期に彼らを助ける数人の女たちからなる。女や子供たちのために仮の小屋がかけられる。小家畜の世話は牛よりも手がかかるので、「小家畜のキャンプ」は若者や少年たちによってのみ構成されている。このキャンプは、たまたま同じ場所に家畜を追ってきた牧童たちが形成するもので、単に囲いによって囲われているにすぎない。

乾季の間「ベース・キャンプ」は牛を追って西へ向かう。「小家畜のキャンプ」もだいたい同じパターンを描くのだが、点々と残る牛の食んだ後の牧草地を行くので、より複雑な行程をとる。

さらに乾季が進むと、「ベース・キャンプ」は一転してオモ川の方へ戻る。「ベース・キャンプ」には、乳牛、去勢牛、毎日水を必要とする子牛がいる。これにたいして、「家畜キャンプ」はさらに西へ進む。「家畜キャンプ」は一日おきに水場と牧草地の間を行き来する。この間「ベース・キャンプ」と「家畜キャンプ」の間のコンタクトは少なくなる。

「ベース・キャンプ」の川に向かう動きは、オモ川の氾濫の終了と農耕の開始の時期に一致している。各世帯はそれぞれの利害に応じて「部落」に「居住単位」を形成する。前年と同じ「部落」に帰るか否かは、「河岸台地」の自分の耕作地が冠水したかどうかによる。

オモ川西岸の「部落」と東岸にある「冠水低地」の農地が遠い場合、近くに農地をもつ者どうしが集まり「耕作者キャンプ」を形成する。これは普通一〇〜一五戸、多いときには数百の小屋からなる。またこの時期は「冠水低地」の牧草を求めて「牛のキャンプ」も東岸に渡る。「牛のキャンプ」は、ミルク、穀物、補助的な労働のやりとりによって、「耕作者キャンプ」と密接なむすびつきをもつ。

さて、ここからわかるように、年間を通じてみたダサネチの人々の動きは、異なった単位間の動きとしてみることができる。そしてこれらの単位は、その構成メンバーや機能が異なっているだけでなく、その時々の必要に応じてメンバーの種類や数が変化し、統合、移動、分散をくりかえす。ダサネチは移牧に要する労働力の問題を、せまい家族制経済の枠を解消し、全く異なった労働単位を組織することによって解決しているのである。(ただしここで注意せねばならないのは、家族制経済自体が解消されているのではないという点である。ひとつの世帯はいくつかのキャンプに分散するが、それぞれのキャンプに集まる人々およびその家畜は相互に独立している。そこでなされるのは必要に応じた共同労働なのであり、世帯自体が解体されて全く新しい経済単位が形成されているわけではない)。それではこのような離合集散と、労働単位の組織化は、どのような社会的原理に基づいているのだろうか。

(4) 婚姻と仲間関係

前節までで、氾濫原農耕と移牧というダサネチの生業システムの主要な二つのタイプを検討した。そして、各世帯が生計を維持するためには、農耕においては資源にたいする権利を、牧畜においては労働力を、世帯の外から何らかのルートを通じて手に入れねばならないことを示した。そしてこうした生計維持のための条件は各世帯に等しくかかるため、そうしたルートが社会的に制度化されているであろうことを示唆した。社会的な資源や労働力は、何らかの中心的な政治システムによって統制され、分配される場合と、各世帯が個別に形成する互

酬的な絆によって供給される場合が考えられるが、ダサネチは後者の方策を用いている。それでは、こうした互酬的な絆は、どのような社会的原理によってとりむすばれるのだろうか。

ダサネチの各世帯が他の世帯ととりむすぶ互酬的な絆の形成原理は、大きく二つに分けて考えることができる。ひとつは婚姻による姻戚関係であり、もうひとつは契約による仲間関係(bond partnership)である。

I　婚姻と姻戚関係

ダサネチの婚姻制度を、各世帯が資源への権利と労働力を他の世帯から何らかのルートを通じて供給されねばならないというこれまでの考察によって明らかになった問題に照らしてみるならば、次の二点が興味深い特徴として現れる。ひとつはインセスト・タブーによって規制される配偶者選択の社会的範囲の問題であり、他のひとつは花婿が花嫁の姻族に支払う婚資の量と、その分配の社会的範囲の問題である。結論を先取りして述べるなら、この二つの制度はどちらも、ダサネチの男が婚姻によってとりむすぶことが可能な社会的絆のオプションの範囲を、より拡大するように機能しているとみることができる。

インセスト・タブーによって禁じられている配偶者選択の範囲は、次のとおりである。反対半族、年令体系の反対交番(alternation)、同一のクラン、同一のサブクラン、同一の牛の焼き印(cattle brand)をもつ者、ある種の仲間関係。

ダサネチの半族組織(moieties/dolo)は、Badiet (outside)とGerge(womb)と呼ばれる内婚半族からなっている。それぞれシンボリックに男と女を表し、このことは様々な儀礼で強調される。子供は自動的に父親と反対の半族に属する。だから父と子が同一の女性をめぐって競合することはない。

年令体系は、それぞれの部族セクションの中心的な政治制度である。年令体系は六つの世代組(generation set)からなっている。最も年長の世代組から牡牛(bull/ara)と呼ばれる約三〇人の人々が選ばれ、彼らは全部族セクションの政治的および儀礼上のリーダーとなる。六つの世代組は下のように、それぞれの対をもち、三組でひとつになったふたつの交番に分かれている。

Numor　↕　Nyogolomogen
Niimeto　↕　Nikorio
Nigabite　↕　Niimkolio

子供は父親と反対の対の世代組に属す。ふたつの交番はそれぞれ内婚単位となっている。半族によって二分されるメンバーと、交番によって二分されるメンバーは一致しているわけではない。

クラン(tur)は部族セクションの構成単位である。クランの構成メンバー間には系譜的な関係はなく、地域的に局在してもおらず、結合力は弱い。父系を通して継承され、外婚単位となっている。

クランはさらにいくつかのサブクラン(bii)から構成されている。ひとつのクランを構成するサブクラン間にも、またひとつのサブクラン自体のメンバー間にも、血縁関係は認められない。クラン同様外婚単位である。

ダサネチの「親族集団」は、様々な部族セクション、クラン、サブクランの中に分散している。これらの「親族集団」は同一の牛の焼き印をもっている。逆に牛の焼き印が同一である場合、同一の「親族集団」から派生した子孫であるとみなされる。牛の焼き印が同じ場合、

婚姻はできない。ただし、現実に互酬的な協力関係によって機能している姻族を含む親族関係と、この牛の焼き印を共有している「親族集団」は、異なる。

これらの規制のほかに、いくつかの結合力の強い仲間関係の間では、婚姻が忌避される。

このように、ダサネチの配偶者選択の範囲は、多くの異なる社会的原理によって規制されている。このことは裏返すならば、すでに存在する社会的紐帯の外で配偶者を選択し、新たな社会的絆を形成するということである。これにより親族が特定の社会的領域に固まることが妨げられ、広範な姻族結合の形成が可能になるのである。

こうして多くの婚姻規制によってすでに存在する社会的結合の外に求められた配偶者との婚姻は、未知の人々との新たな社会的結合の可能性を開くわけだが、婚姻にともなう婚資の移譲がこの社会的結合の範囲をおし広げる。

ダサネチでは、婚資を受け取ることと、性的な関係をもつことを、ともに「食べる（eating）」という。つまり、嫁の与え手側の婚資を受け取る権利と、嫁のもらい手側の花嫁にたいする権利が等置されているのである。婚資は牛の婚資（fotcho）と小家畜の婚資（shebedam）からなる。アルマゴールによれば、最終的に移譲される婚資の数はあわせて八〇頭にものぼる。けれどもこれは一度に渡されるのではなく、何年もかけて、ときには一生かけて少しずつ渡される。

これらの婚資が、いつ、誰に、何頭支払われるかという問題は、非常に複雑である。詳細は省くが、支払われる相手は花嫁の母に始まり、兄弟姉妹から叔父叔母、はては父方の祖父の兄弟の息子や父と仲間関係にあるものまでを含む三〇近いカテゴリーの姻戚におよぶ。また、受け取る婚資の数は、牛六頭から、小家畜のみに至るまで様々である。これらの多数の姻戚にどのような順番で婚資を払うかについては、アルマゴールによれば、「道徳的な請求権」「受け取るべき家畜の数」「花嫁への血縁上での近さ」という三つの異なった基準に準拠して決められる。これら三つの基準はそれぞれ、請求権の強さによって婚資を受け取るべき親族カテゴリーの優先順位を三段階に分けているのだけれど、三つの基準によって順位付けられた優先順位の階梯の間には一貫性がない。だからこれらの基準は婚資が支払われる相手の範囲をおおまかに決めはするが、支払いの順番まで機械的に規定することはできない。こうした非一貫的な諸基準のおかげで、婚資の支払いにおいては様々なネゴシエイションが可能になってくる。嫁のもらい手側、すなわち婚資の支払い側は、広い社会的範囲にわたってだけでなく、長期的な時間的展望のなかにおいても、多くのオプションの中から、自分にとって都合のよい社会的結合を選択して作りだしてゆくことが可能になる。

さて、このようにして形成される婚姻による姻戚関係の絆は、嫁の与え手側にとっても、受け手側にとっても、いくつかの利益をもたらす。両者の関係は、花婿と花嫁の父親の世代という異なった世代間の関係と、花婿と花嫁の兄弟の世代という同一世代間の関係に分けて考えることができる。

異なった世代間の関係にみられる相互の利得は、次のようなものである。年長世代は自分の婚姻や儀礼の執行のために、すでに手持ちの家畜が少なくなっている。そのため婚資によって手持ちの家畜の数を増やすことが重要な課題となる。一方花婿は、年長者がすでに確立している多くの社会的な絆を利用して、「河岸台地」の耕作権や牧畜に必

要な労働力を確保することができる。

同一世代間の関係では、次のような利得がある。婚資分配のフレームワークを通して、今後より親密な互酬的絆を確立しうる同年配の仲間を得る。こうした中から、特別な仲間関係が確立されることも多い。

II 仲間関係

ダサネチ社会においては、基本的な生産＝消費単位は核家族世帯である。こうした世帯が生態的な環境に適応した複雑な牧畜形態を維持していくためには、共同的な労働がなされる必要があることはすでに述べたとおりである。共同労働のパートナーは、契約的な「仲間関係(bond partnership)」によって得られる。こうした仲間関係はその内容によっていくつかの種類がある。

a　唇の仲間関係 (bond partnership of "lips"／lil—metch afo)

十代の少年の間で結ばれる。ネックレスなどの簡単な贈り物が交換されるが、婚姻の規制や家畜の交換はなされない。この仲間関係にある少年たちは、牧草地や各地キャンプについての情報の交換や、一方が留守のときに他方が家畜の世話をするといったように、乾季の牧畜活動において協力する。通常成人儀礼までで解消され、その後も関係を続ける場合は、新たな仲間関係を確立する。

b　贈り物の仲間関係 (bond partnarship of "gift"／lil—metch shisho)

20～40才の男たちの間で結ばれる。数回にわたりコーヒーと家畜の交換がなされる。この関係は、そのときたまたま両者の間にある経済的な利害の一致に基づいて結ばれる。

c　塗布の仲間関係 (bond partnership of "smearing"／lil—metch uru)

供犠獣の内蔵を塗布するのでこのように呼ばれる。この関係は、少年が肉体的に成熟したときに、同じ世代組に属する年長者との間に結ばれる。「塗布された者（少年）」と「塗布した者（年長者）」のそれぞれの親族の間にも関係が確立され、相互の婚姻は忌避される。年長者の方が dimi と呼ばれる儀礼を行うとき、少年は牡牛を一頭贈る。そのかわりに、少年は年長者の娘が結婚したとき、その婚資の一部を得る権利をもつ。

d　占有の仲間関係 (bond partnership of "holding"／lil—metch kerno)

30代の初めになされる割礼儀礼のさいに取り結ばれる。割礼される者が自分のパートナーである「占有する者 (holder)」を選ぶ。「占有される者(held)」は、「占有する者」からあらかじめ贈られたアクセサリーをつけて割礼の儀礼に臨む。この関係は塗布の仲間関係よりも強いとみなされており、同様の婚姻規制のほかに、両者の間の肉体的接触の忌避がみられる。「占有する者」に選ばれるのは、通常高い社会的地位にあるとみなされている年長者である。若者がこうした人物に求めるものは、様々な社会的な絆、労働力としての多くの子供、「河岸台地」へのアクセス、政治的な影響力といったものである。また年長者は若者とのこのような関係を多くもつことによって、社会的なネットワークを拡大し、その影響力を強めることができる。

e　命名の仲間関係（bond partnership of "name—giving／lil—metch meto）

最も強い仲間関係である。新生児が命名の儀礼で誰かの名にちなんで名付けられたとき取り結ばれる。「名を与える者（name giver）」と名を与えられた幼児双方の広範囲の親族がかかわる。「名を与える者」は名を与えられた幼児の父の息子とみなされ、幼児は彼を「私の父の息子」あるいは「兄」と呼ぶ。この二人を中心として、双方の親族の系譜は重ね合わされ、あたかもひとつの親族のようにみなされる。

これらの関係は「唇の仲間関係」や「贈り物の仲間関係」のように一時的なものから、「塗布の仲間関係」、「占有の仲間関係」、「命名の仲間関係」のように、順により広範で永続的な関係をもつに至るものまで様々な強さをもっている。「唇の仲間関係」、「贈り物の仲間関係」、「占有の仲間関係」では、相互的な贈り物のやりとりが関係を維持する重要な要素となっている。関係の破棄は、自分に贈られたものと同等のものを相手に返すことによってなされる。それに対して「塗布の仲間関係」と「命名の仲間関係」では、直接的な贈り物のやりとりの重要性は減じ、より間接的ではあるが永続的な、婚資にたいする権利、義務関係で結びついたネットワークの中に組み込まれる。当初弱い関係で結び付いていた者たちがより強い関係をもとうとするならば、当初の関係を別のより強力な仲間関係と置き換えることになる。反対にもし相互の利益がくいちがうなら、やがて関係は破棄される。いずれにせよ仲間関係は姻族関係や親族関係と同様に、継続的な交換と協同によって、絶えず強化されなければならない。

このようにダサネチは一生の間を通じて、親族関係、姻族関係、仲間関係による様々な社会的紐帯をもつことになる。そしてこれらの社会的紐帯は、あるときは相互の利益に基づいて新たに作られたり、従来のものが強化されることもあり、また逆に利益のくいちがいによって破棄されることもある。このような関係は、基本的に、その形成、存続、破棄がいずれも個人の利害に基づいてなされる「個人中心的（ego—centered）」な関係である。社会全体としてみるならば、このような個人的関係は、明確な境界をもたず途切れることなく複雑にはりめぐらされた諸個人の間のネットワークとして現れる。

さて、こうした複雑に入り組んだネットワークが、ダサネチの生業システムの在り方に対応したものであることは明らかである。くりかえしを厭わずに言えば、a　決定的に重要であるにもかかわらず、不規則な冠水のゆえに誰一人として分配の中心とはなりえない「河岸台地」の分配の問題と、b　複雑な移牧に必要であるにもかかわらず、世帯内労働力のみではまかないきれない労働力の問題を、こうしたネットワークがいっきょに解決していると思われるのである。「河岸台地」の耕作地をそれぞれの世帯がどこから借りているかについて見てみると、このようなネットワークの果たしている役割をみてとれる。アルマゴールが調査した一六九例のうち、親族から借りた者が三五例（二一％）、仲間関係にある者またはその親族から借りた者が三〇例（一八％）、年令組の仲間から借りた者が二四例（一四％）、同じ「部落」あるいは「居住単位」に住む者から借りた者が一四例（八％）である。ふたつの主要なネットワーク形成の社会的原理である、親族、姻族関係によるものと、仲間関係によるものとを合わせれば、全体の六六パーセントになり、さらに他の社会的関係によるものを加えれば八八パーセントになる。ここで興味深いことは、耕作地へのアクセス

が、ほとんどの場合すでにある社会的関係を通してなされているということだけではない。こうした関係は一つの種類に固まってはおらず、親族関係から近隣関係に至る様々な関係が利用されているのである。多様な社会関係のオプションが、各世帯に適切な社会関係の選択の余地を提供しているのだ。

さてここまでで、「河岸台地」の耕作地の分配の問題を解決する社会的な仕組みとして、個人間に結ばれる社会的ネットワークのもつ意味を考えてきた。「河岸台地」の耕作地は、多元的な原理に基づいてとりむすばれている様々な互酬的な社会的紐帯を通して、人々が個人的にアクセスすることによって、解決されていた。それでは牧畜活動と社会的ネットワークの関係はどのようにとらえられるのだろうか。ひとつには、「河岸台地」における耕作地の問題と同じように、すでにある社会的紐帯に基づいて労働の交換がなされるということができる。けれどもここで注意せねばならないことは、牧畜にみられる頻繁な移動や集団の離合集散それじたいが、すでにある社会的ネットワークの枠組みを越えて、新たな社会関係を生みだす契機となっているという点である。「贈り物の仲間関係」は、そのような場合に結ばれる関係であった。このように人々は、頻繁な移動をくりかえすなかで、常に新たな人々と新たな関係をとりむすぶ潜在的なチャンスをもっているといえよう。さらに「河岸台地」での耕作をとっても、ひとつの耕作地にとどまることが四年と続かないことを考えるならば、耕作活動も社会的ネットワークの変化をうながす要因となっているといえるだろう。このように、社会的ネットワークは、生業システムを稼働していくさいに生ずる問題を解決する枠組みを提供する一方で、逆に生業システムも生産様式における労働力の組織過程に一定の偶然性をもちこむことにより、ネットワークの変化をうながしているのである。

(5) 「権力」と「社会」

ここでこれまで明らかにしたダサネチ社会の構成原理を、出発点としたサーリンズの「家族制生産様式」の理念型に照らして、その理論的意味を問うてみよう。

ダサネチにおける基本的な生産・消費の単位は世帯 (houshold) であるにもかかわらず、各々の世帯が他から全く独立にその生計活動を維持して行くことは困難である。この困難は、ダサネチの採用している移牧および氾濫原農耕という生業システムを首尾よく機能させてゆくさいに必要とされる要件を、それぞれの世帯が各戸独自には満たしがたいという点に由来している。ここからダサネチの生産様式は、まず分業の様式において、次いで所有の様式において、サーリンズのいう「家族制生産様式」の理念型から逸脱することになる。

生態的環境に適応したダサネチの複雑な移牧の様式は、世帯内における性による分業によってまかないうる以上の労働力を必要とする。ダサネチの牧畜においては、世帯という枠組みは労働力の組織化の外枠としては機能していない。そのかわりに、親族・姻族・仲間関係、およびその場の状況に応じたアド・ホックな関係により労働は組織化される。

氾濫原農耕では、労働力は世帯内でまかなわれる。けれどもここでは、牧畜では問題にならなかった資源の所有、あるいは、利用の権利が問題となる。先に述べたように、西岸の牧草地および東岸の「冠水低地」は、そこをテリトリーとする部族セクションに属する者なら誰

でも自由に利用しうる。それにたいして、「河岸台地」の所有権は、特定の個人に帰属している。また前者の資源は豊富であるのにたいして、後者の資源は希少でかつ必須のものであり、各世帯がそれをめぐって競合関係に入りうるものである。このことからすぐに、「家族制生産様式」における資源の所有および開発に関するサーリンズの規定、すなわち、「所有権をもつ集団や共同体の一員として家族が、社会資源の自分の分け前を、直接に独立して、自らの生活のために開発する権利」は、「河岸台地」にはあてはまらないことが明らかだといえる。ここで興味深いことは、希少資源である「河岸台地」は少数の人々によって「所有」されているにもかかわらず、この「所有」の不平等は、様々な「社会関係」を通した他者の請求権／利用権の強さによって希釈され、社会内の一般的な不平等を結果するにまでは至っていないということである。それではこうした他者の請求権の強さは、何によって説明されるのだろうか。

まず、第三者の、一次的な借り手にたいする権利について。前にも述べたように、「河岸台地」の冠水じたい不規則である。一定の場所に四年以上とどまる世帯は希である。とするならば、あるときに第三者に自分の耕作地を又貸ししうる立場にある者も、今までの耕作地が冠水せずに、逆に他者に頼らねばならない立場に陥るということは、頻繁に生ずるだろう。だから耕作地の貸与は、長期的に見るならば、一種の互酬的関係に基づいていると考えられる。

それに対して「河岸台地」の所有者は、自分のために所有地の中でも最も良い部分を確保することができる。だから年毎の冠水の不規則性に対しては、より影響されにくいだろう。けれどもより長期的に見るならば、オモ川の水位は大きな上下を示している。だから「河岸台地」の安定性も絶対的なものとは言えない。

さらに、「河岸台地」における農耕では、一方的に貸与する側にあるものでも、牧畜活動では、他からの労働力に依存することがままある。もっともこのことは、すべての世帯についていいうることである。

このように、ダサネチの生業システムにおいては、長期的に見れば各世帯は何らかの形で他の世帯に依存せねばならない。だから一定期間における一定の土地にたいする権利も、長期的な互酬的関係の中で相手方に分け与えられるべきサーヴィスのひとつとみなすことができるだろう。

さて、このような分業の様式および所有の様式における「家族制生産様式」の特徴からの逸脱は、さらにその結合の様式にまで影響を及ぼす。すなわち、サーリンズの指摘した、「家族制生産様式」をとる社会に見られる「アナーキー」という離散的様相が、ダサネチではみられないという点である。

これは当然ではある。牧畜における労働力の必要性、および氾濫原農耕における「河岸台地」の必要性を、ダサネチの各世帯は互いに依存することによって満たしているからだ。このような相互依存のためのルートとして、各世帯の間には親族・姻族・仲間関係などによる諸関係がとりむすばれている。当然社会の最小の基礎集団である世帯は、それぞれの利害に応じて行動し、かつて関係を結んでいた他の世帯から離反することもありうる。けれどもそれは社会全体からの離脱を意味しない。通常古い関係の廃棄は、新たな関係の開始によって埋め合わせられる。一つの世帯がこうした互酬の網の目から逃れ、単独で生存を確保することは不可能だからだ。またこうしたネットワークのありかたを規定するルールは、諸種の関係が少数の世帯のみの間で重複

してとりむすばれないようなかたちになっている。だからダサネチでは、少なくともテリトリーの所有単位である部族セクションの内部には、人々を対立や分裂に導くような諸集団の形成は、理論的にもありえないし、実際にもない。そして「社会」は存在する。それはもはや「家族制生産様式」の社会に見られるように、各世帯に架せられたくびきのようなものではない。各世帯の生存にとって欠くことのできぬ互酬的諸関係、そしてその結果としてのネットワーク的社会システム、これがダサネチにおける「社会」である。

それでは、こうした社会における「権力」とはどのようなものなのだろうか。サーリンズによれば、「家族制生産様式」社会における「権力」は余剰生産物の贈与によって立ち上がり、それが階層を派生し、やがては民衆の過剰労働と「権力」によるその搾取に至るという。「権力」は二重に余分である。それはまず、余剰生産物を必要とする。さらにそれは、その余剰生産物の贈与によって、(生存レヴェルから見たら)余分な社会関係をうちたてようとする。まず互いに負債のない状態、次いで余剰生産物の贈与による相手方への負債のおしつけ、それに伴って生ずる非対称的な社会関係、これが「権力」が派生するプロセスである。ダサネチの場合はどうか。確かに余剰生産は可能であろう。ダサネチは決して生存レヴェルぎりぎりの線で生きているわけではない。けれども特定世帯が余剰生産物を首尾よく産出する可能性は、その世帯が牧畜においていかに効果的に他世帯の労働力を利用し、また農耕においていかに首尾よく他世帯から良い耕作地を借りうるかにかかっている。余剰生産物の産出は、他世帯にいかに効果的に依存するかを前提とする。言い換えるならば、他への負債を前提とする。とするならば、いかに余剰生産物の贈与によって相手に負債を与えても、それは余剰生産物の産出において被った負債によって相殺されることになる。世帯の生産性が他の世帯との相互依存的な社会関係に規定されているダサネチ社会では、サーリンズが理論的に想定したような形での権力の発生は困難であると言わねばならないだろう。それならば実際にダサネチ社会には権力者はいないのか、あるいは、いるとすればどのようなものであるのか。

理論的に予測できるように、ダサネチには単独の卓越したリーダーはいない。ダサネチのリーダーシップは「牡牛(buls/ara)」と呼ばれる約三〇人の老人たちによって握られている。「牡牛」は全部族セクションの政治的・宗教的リーダーである。人間および家畜の多産性をコントロールすると考えられており、世俗的な紛争の調停、宗教的な儀礼の遂行において重要な役割を演ずる。この「牡牛」の地位は、帰属的な側面と、達成的な側面をもつ。

「牡牛」は、年齢体系の最年長の世代組から選ばれるという点で、帰属的な地位である。

「牡牛」の地位にかんしてより興味深いのは、その達成的側面である。「牡牛」たちは最年長世代組のメンバーであるけれど、その逆は真ではない。それではどのような人々が「牡牛」となるのだろうか。

アルマゴールによれば、ダサネチにおいて権力をもつ者は、あらかじめ紐帯のなかった個人間を仲介することに長けた者、言い換えるならば、ブローカーとしての能力(brokerage power)をもつ者であるという。このような人々はやがて「お偉方(notables)」として他の人々の信頼を得、「牡牛」に選ばれるチャンスも大きくなる。有能なブローカーがなぜ人々の信頼を得るのかということは、その能力が「河岸台地」の分配のさいにもっとも充全に発揮されるということを考えるな

らば容易に納得がいく。「河岸台地」の耕作地は、1年の経済サイクルにおいてとても重要な位置を占めている。前年に耕していた耕作地が翌年冠水しなかった場合、その世帯は新たな耕作地を他者から借りなければならない。けれども貸し手は、すでに彼と何らかの社会的関係にある者か、これからそのような関係をもちたいと思う者にしか、耕作地を貸与しない。何らつながりのない者が耕作地の貸与を要求しても、貸し手はこれを断る。この場合、貸し手および借り手双方とつながりのある第三者が間に入るならば、耕作地の貸与は承諾される。第三者がブローカーの役割を演ずるのである。こうした有能なブローカーは、重層的なネットワークの中心に位置する人々である。仲介での成功が続けば続くほど他の人々の信頼が高まり、ネットワークも強力なものとなる。従って彼自身の影響力も強くなっていく。

ダサネチはこのように多くの力のある社会関係をもつ実力者をmafargogoと呼び、単に多くの家畜をもつ者(ma kamur)と区別している。アルマゴールはこのような人々を、単なる家畜や土地のような資産の保有者と区別して、「社会的信望(social credit)」をもっている人々だと説明している。アルマゴールによれば、「社会的信望」は次の二つの要素から成っているという。ひとつは、潜在的に操作可能な広範な社会的紐帯をその人がもっていると、他の人々がイメージしていること、もうひとつは、誠実で信頼するにたり、なおかつその社会的紐帯を、自分の個人的利益のためには用いていないのであるとみなされていることである。

「社会的信望」を集め、ブローカーとしての強力な力をもつ人々は、多くの親族・姻族・仲間関係を確立している年をとった人々である。彼らはさらに、複婚や若者との仲間関係をむすぶことによって、ネットワークを拡大してゆく。牧畜は自分の息子にまかせ、自分自身は「部落」に定住し、耕作者たちの移動状況や、耕作地の冠水状況についての情報を収集する。その情報を操作することで、さらなる影響力を発揮する。こうした力の蓄積が、彼らが「牡牛」という公的な権力の座につくチャンスを高めるのである。

けれどもこのような力の蓄積過程には、常に一定のチェックがかかっている。ひとつは、fargogintеと呼ばれる強圧的な影響力の行使に対する、ある程度制度化された非難である。fargogintеを用いたと非難されるのは、例えば、あるサーヴィスを提供した者が、直ちにその見返りを要求したような場合である。ダサネチでは速やかな返済は、両者の関係を終結させるものとして嫌われる。いったんfargogintеを用いたとして非難されれば、彼はトラブルメーカーとみなされ、その「社会的信望」に、大きな傷がつくことになる。ブローカーとしての力は、彼のもつネットワークにたいして人々の抱いているイメージに依存している。だから力の蓄積、あるいは減少のプロセスは、いずれの方向へであれ「予言の自己成就」の様相を呈することになる。強い力をもつ者でも、こうした非難を受けたらひとたまりもない。fargogintеにたいする非難は、強圧的な影響力の行使にたいする事前のブレーキとなる。

さらに年長者への権力の集中を妨げる要因として、家畜の数の逓減をあげることができる。年長者は婚姻の婚資の支払いや通過儀礼での供犠により、自分のもつ家畜の数が少なくなっている。そのうえ「社会的信望」を維持するには、年下の世代組の仲間などに気前良くおごらなければならない。また自分のネットワークを有効なものとして維持したり、トラブルをもみけすために、家畜の贈与が必要になる。こ

のように、ネットワークが拡大すればするほどそれにかさむ出費は多くなり、手持ちの家畜の数は減少する。結局彼のもつ影響力の範囲は、家畜の逓減によって規制を受けることになる。

いずれにせよダサネチの社会関係の多くは、生業システムにおける互酬性に基づいた実質的な相互依存関係である。だからそれらは生態的な環境の変化に伴って容易に変化する。個人のネットワークが大きければ大きいほど、それにたいする人々のもつイメージと実際のネットワークの有効性の間の乖離は大きくなる。そうした乖離が明らかになると、「社会的信望」は失墜し、影響力も減少する。

このようなメカニズムが働いているので、ダサネチでは特定の個人が強力な権力をもつことはできない。人々はある一定の振幅の間で、その影響力の変動をくりかえしているといえるだろう。

結　語

サーリンズは「分節的社会」と「首長制社会」に共通する「生産様式」を「家族制生産様式」と規定し、その特徴が資源と労働力の過少利用にあるとしたうえで、その特質として次の六点をあげた。それは(1)労働力―家族内における性による分業、(2)生産手段―マン・パワーに依存した単純なテクノロジー、(3)生産の目的―家族の生計のための生産という限られた目的、(4)資源の所有と権利―家族が資源を独立して開発する権利、(5)生産物の分配―家族内における財とサービスの共同寄託、(6)社会構造―社会の離散的傾向であった。それにたいしてダサネチの生産様式は、いくつかの点でこの類型から逸脱している。

まず第一に、ダサネチの生業システムにおいては、資源は過少利用されず、むしろその希少性が生産様式の規定要因となっていることが指摘できる。すなわち、a　牧畜においては、家畜の総数にたいして放牧地が希少であり、b　氾濫原農耕においては、耕作世帯にたいして耕作適地である「河岸台地」が相対的に希少である。aより、過放牧の危険を避けるために、複雑な移牧の形態がとられる。(1)そこから労働力は、「家族内における性による分業」だけでなく、世帯を越えた共同労働が必要とされる。またbより、各世帯は耕作適地をめぐって競合状態に入る。(4)そこから資源の所有と権利については、世帯は「資源を独立して開発する権利」はもちえず、逆にそれを他の世帯に依存することになる。このようにダサネチにおいては、経済的な最小単位は「家族制生産様式」をとる社会と同様に世帯であるにもかかわらず、その生計に必要な労働力と資源への権利において、他の世帯への依存が不可欠となる。(5)それは財の交換のレベルにも反映する。すなわち、財とサービスは世帯内にとどまらず、婚資や贈り物という形で、世帯間で互酬的に交換される。(6)この結果社会構造は、財の交換によって形成され、労働力と資源への権利のフローのルートとなる、世帯間の水平的なネットワークの形をとる。

ところでサーリンズは、権力の発生の契機を親族制機能の徹底化としてとらえた。余剰生産物の恒常的な贈与が、与え手＝受け手の関係を主人＝配下の関係へと転化させるとみたのである。ダサネチの生業システムではまずもって特定世帯の余剰生産物の恒常的な生産自体が困難であるので、サーリンズの考えるような形での権力の発生の可能性は閉ざされている。それではダサネチにおける権力はどのように立ち現れてくるのか。ダサネチの権力指向者は自分の生産したモノでは

なく、自分のもつ社会的ネットワークによって引き出される利得を与えるのである。けれどもそうしたネットワーク自体うつろいやすく、常に仲介が成功するわけではない。そのため人々の威信を背景にした影響力は、一定の振幅で揺れ動くことになる。ダサネチは不安定な生態的要因に適応した生業システムと生産様式をもっている。けれども権力（者）が、まずもって財の贈与という経済的な基盤を背景として集団から「離床」するのだとすれば、ダサネチ社会は強力な権力の発現を用意する社会＝経済的基盤を欠いたものといえるだろう。

以上本稿では、サーリンズの議論を手掛かりにして、ダサネチのおかれている生態的環境、その生業システム、生産様式、社会構造、そして権力形態の間にみられる連関を論理的にたどってきた。そしてダサネチの生産様式は、サーリンズが「部族社会」一般にみられると想定した「家族制生産様式」にはいくつかの点であてはまらないこと、その形態は生態的な環境に適応した生業システムに規定されていること、そしてそのような生産様式をとるダサネチ社会には絶対的な権力の生ずる余地のないことを明らかにした。

東アフリカの牧畜社会の多くは、強力な首長を欠いた「分節的」レベルにある社会である。サーリンズの進化論的な位置づけによるならば、それは「首長制」レベルに移行する以前の「離散的」な社会とみなされるだろう。けれどもダサネチの事例で明らかなように、それらを生業システムとの関連で詳細に分析するならば、サーリンズの類型化とは異なったシステム間の構造的な連関が明らかになる可能性がある。事実ダサネチの婚資の例で見られたような大量の家畜の移籍は、多くの社会で報告されている。こうした諸社会の検討は、サーリンズの議論によって示唆された社会の「下部構造」からみた権力の発生基盤の分析という興味深いアプローチの方法を、より精緻にする契機となるだろう。本稿はその最初のステップであり、今後より広範な社会の検討を通して、その展開をはかりたい。

参考文献

Almagor, Uri. 1978. Pastoral Partners:affinity and bondpartnership among the Dassanetch of south—west of Ethiopia. Manchester University Press.

Sahlins, Marshal. 1968. Tribesmen. Prentice—Hall.（青木保訳「部族民」一九七二年）

Sahlins, Marshal. 1972. Stone Age Economics. Chicago:Aldine—Atherton.（山内昶訳「石器時代の経済学」一九八四年）